

志村 恵「本の中のふたごたち」⑥

『シナの五にんきょうだい』と『王さまと九人のきょうだい』

多胎児が登場する本や物語のうちで、なに子が最大でしょうか？三つ子、それとも四つ子？違います。一番多いのは、あくまでも僕の知っている限りですが、西山直樹の『パパはまほうつかい』シリーズの『まほうつかいのにちようび』の14つ子です。でも、これは厳密に言えば、ふたごが魔法によって分身したせいで14つ子になったわけで、正確にはふたごに変わらないわけですから無効です。つい最近まで、僕は赤塚不二夫の『おそ松くん』の6つ子が最高だと思っていたのですが、何と9つ子がありました。それが今日採り上げる『王さまと九人のきょうだい』です。

実は、これとほぼ同じ筋立ての物語で、多胎の規模が違うものに『シナの五にんきょうだい』があります。この本は、しばらくの間、「シナ」という言葉が中国を示す差別的用語ではないかとの議論があつて、手に入らなかったのですが、待たれていた再発行がなされました。「シナ」という言葉は、最近では東京都知事選の候補者が使用して問題になったりして皆さんも知っていると思います。差別用語に関しては、現実にその言葉によって「差別された」、「心に痛みを憶えた」と感じる人がいる限り、使用されるべきではないというのが僕個人の考えですが、それとは別に、1938年に原作が出版されたこの面白い絵本が再発行されたことは嬉しいと思います（題名などは「ちゅうごく」になおしてもよかつたかもしれません）。

『シナの五にんきょうだい』では、「むかし シナに 五にんの きょうだいが いました。五にんは そっくりな かおを していました」とあるだけで、この五人が五つ子かどうかは書いてありません。しかし、そっくりで、絵を見る限り区別がつかないほどの「瓜五つ」です。ですから一卵性の五つ子と考える良いでしょう（そんなの現実的ではないが）。一方『王さまと九人のきょうだい』では、イ族のあるおばあさんが、おじいさんが仙人らしき老人からもらってきた子どもを授ける丸薬を九つ一緒に飲んでしまったため、一度に子どもを九人懐妊し、出産したとありますので、これは完全に九つ子です。数からいっても、多胎であるとの確証からいっても、これが最高です。しかも、物語の筋から考えると、そして絵から判断しても、これはそっくりな一卵性の九つ子なのです（こうなると「生物学的には……」などと書く気にもなりませんし、書いたところで無意味です）。この「丸薬」というのが、また曲者でして、昔ばなしながら、何だか現代の「排卵誘発剤」などの不妊治療を予言したかのような気分さえなってきます。

さて、『王さまと九人のきょうだい』の筋に戻りますが、一度に九人も赤ん坊が生まれたため、この老夫婦は子育ての自信を失い、涙をこぼします。しかし、あの仙人のような老人が姿を現し、二人を励まし、更にこの九つ子に名前を付けてくれるのです。名付け親の役割を果たすというのは、洋の東西を問わず、家族同然の付き合いをするということですから、現代的に読めば、この老人は育児カウンセリングをし、「子育て支援」をしてくれた上、家族同然になってくれたわけです。

ところで、その付けてくれた名前がまたへんてこなものでした。その名前は、「ちからもち」「くいしんぼう」「はらいっぱい」「ぶってくれ」「ながすね」「さむがりや」「あつがりや」「切ってくれ」「みずぐり」というものでした。『シナの五にんきょうだい』の場合と同じで、それぞれが何か非常に特異な能力を持っていて、その能力を示す名前が付けられたわけです。名は人を表すということなのでしょう。

ところで、ふたごはよく遺伝子が分割されてしまって、片一方がある能力があれば、その遺伝子はもう一人には行かないので、もう一人はその能力がないと誤解されたりします。典型的な例は、アーノル

ド・シュヴァルツネガー主演の映画『ツインズ』（1988年作品、イワン・ライトマン監督）です。これは、シュワちゃん扮するふたごがよい方の遺伝子を全部取ってしまって、ダニー・デヴィット扮するもう一方がカスの遺伝子しかもらえなかったという無茶苦茶な設定になっています。こんなことは生物学的には絶対にあり得ませんから、子どもの頃は、たとえ冗談であっても絶対にこの手のことは話題にしない方がよいでしょう。ただし僕たちは大人になってからはこのジョークを気に入ってはいました。文学的表現ということでは、一人の登場人物に一つの性格が結晶化され、しかも、その性格を表す名前が付けられるというのは常套です。そういった意味では、この『王さまと九人のきょうだい』は極めて文学的な物語の規則に忠実だと言えるでしょう。

兄弟の一人「ちからもち」が王様の手伝いをして、宮殿にある倒れた竜の柱を直したところから問題が生じます。王様は、そんな力持ちがこの世に存在するなど信じることができず、新たな課題を与えます。その課題をこなせないなら牢屋に閉じこめると脅します（『シナの五にんきょうだい』では、ある事件のぬれぎぬからなんと死刑です）。ここにあるのは、自分の受けた恩にきちんと報わず、次々と難題を科し、ついには自分が滅びるという典型的な昔ばなしの構造です。その新たな課題を九人の兄弟が入れ替わり立ち替わりで解いてしまうというのがこの物語の大筋です。「くいしんぼう」は大釜の飯を平らげ、「さむがりや」は火あぶりになっても平気、「あつがりや」は氷の山に閉じこめられても死にません。結局、最後にこの王様は川に流されてしまい、それ以来イ族のひとは「おうさまからひどいしうちをうけることもなく、楽しく、へいわに、くらしした」と結ばれます。

ふたごは同じことをしたりします。また、同じことを避けたがりもします。僕の場合は、同じことで競うのを避けました。でも、同じ分野で頑張りあうふたごもたくさんいます。『王さまと九人のきょうだい』では、九人がそれぞれに特異/得意な能力を持っていて、みんなで協力して王様をやっつけました。つまり、一人一人の得意な分野を伸ばしてやるのがいい場合があるわけです。それから、二人ともが同じ能力に長じていて、いい意味でのライヴァル関係で切磋琢磨する場合もあるでしょう。それはどっちがいいのか決まっていることではありません。それぞれのふたごとその家族がそれぞれ考え、模索していくことなのです。そして、僕たちはそれを見守り、理解し、励ましたいと思います。



『シナの五にんきょうだい』書影



『王さまと九人のきょうだい』書影

クレール・H・ビショップ文、クルト・ヴィーゼ絵『シナの五にんきょうだい』（川本三郎訳）瑞雲舎、1995年。

中国の民話『王さまと九人のきょうだい』（君島久子訳、赤羽末吉絵）岩波書店、1969年。

『ツインズ』30号（ビネバル出版）から転載